上唇部に発生した類表皮嚢胞の2例

大橋 一之・赤坂庸子・松本浩一・神部芳則

Two cases of epidermoid cyst in the upper lip region

Kazuyuki OHASHI・Yoko AKASAKA・Kouichi MATSUMOTO・Yoshinori JINBU

Abstract: Epidermoid cysts are considered developmental anomalies, and the floor of the mouth is the most common site of these cysts in the head and neck region. We encountered two unusual cases of epidermoid cysts in the upper lip. One case was in a 27-year-old man who complained of a painless mass, which had developed slowly in the left portion of the upper lip. The mass was diagnosed to be a benign tumor and was surgically removed. Another case was in a 9-year-old girl who also complained of a painless mass in the right portion of the upper lip. The mass was also surgically removed. In both cases, epidermoid cysts were diagnosed on the basis of microscopic findings. A short review of the literature is included in this report.

Key words: epidermoid cyst (類表皮嚢胞), upper lip region (上唇部)

緒 言

類皮嚢胞および類表皮嚢胞は、先天的には胎生期における外胚葉の迷入、後天的には外傷や炎症などによる上皮組織の迷入などに由来するとされている^{1, 2)}。本嚢胞は、身体各部に発生しうが、口腔領域ではほとんどが口底部に発現し、口唇部での発生はまれとされている³⁾。最近、上唇部に発生した類表皮嚢胞の2例を経験したので、その概要を報告する。

症 例 1

患 者：27歳，男性。

初 診：平成2年5月■日。

主 訴：左側上唇部の腫瘍。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

現病歴：3～4年前、左側上唇部に米粒大の腫瘍を認めるも疼痛がないため放置していた。その後次第に増大してきたため、某外科に受診し当科を紹介された。

口腔外所見：左側上唇部に健康な皮膚で覆われた境界は明瞭な拇指頭大の腫瘍が認められた。腫瘍はやや弾性硬、無痛性で、周囲組織と一部で癒着を認めた。

口腔内所見：左側上唇部粘膜下に拇指頭大の腫瘍を触知し、同部の粘膜は正常色を呈していた(写真1)。

超音波検査所見：腫瘍は皮下に存在し、低エコーで内部は不均一な像を呈していた。

臨床診断：左側上唇部良性腫瘍の疑い。

処置および経過：局所麻酔下に口唇粘膜側より切開を加え周囲組織より剥離を試みるも一部周囲組織と癒着しており、また被膜は薄く途中で被膜が破れ粥状の内容物の漏出をみた。この時点で類皮あるいは類表皮嚢胞と考え、注意深く可及的に剥離摘出した。しかし、手術から約1か月後初診時と同じ部位に小豆大の腫瘍を触知するようになり、再び増大してきたため再発と診断した。術後3か月間で初診時とほぼ同じ大きさになったがその後はほとんど変わらず、術後5か月目に再手術を施行した。再手術後約6年経過しているが再発を認めていない。

摘出物所見：腫瘍は15×13×8mm大、類円形、単胞性であった。黄白色で滑沢な被膜に覆われており、内容物は黄白色粥状の物質であった。

病理組織学的所見：摘出した腫瘍の全断面のH-E染色では、嚢胞壁は角化を有する重層扁平上皮と線維性結合組織から構成され、皮膚の付属器官は認めなかった(写真2)。

病理組織学的診断：類表皮嚢胞。

症 例 2

患 者：9歳，女児。

初 診：平成3年1月■日。

主 訴：右側上唇部の腫瘍。

自治医科大学歯科口腔外科学講座

(主任：赤坂庸子教授)

Department of Dentistry and Oral Surgery, Jichi Medical School (Chief: Prof. Yoko Akasaka)

受付日：平成9年2月20日

写真1 症例1の初診時口腔内、
口腔外写真
左側上唇部に境界明瞭な腫瘍がみ
られる(矢印)。(上:口腔外,下:
口腔内)

写真2 症例1の病理組織像(HE
染色,上:弱拡大,下:強拡大)
嚢胞壁は角化を有する重層扁平上
皮と繊維性結合組織から構成され、
皮膚付属器官は認めない。

写真3 症例2の初診時口腔外写真
右側上唇部に境界明瞭な腫瘍がみら
れる(矢印)。

写真4 症例2の病理組織像
(HE染色,弱拡大)
嚢胞壁は重層扁平上皮と繊維性結
合組織からなり、角化物様の内容物
があり、皮膚付属器官は認めない。

家族歴・既往歴:特記事項なし。

現病歴:約1年前,右側上唇部の腫瘍に気づいた。その後次第に増大してきたが疼痛がないため放置していた。当科初診の前日に,う歯治療のため受診した某歯科より腫瘍を指摘され,紹介された。

口腔外所見:右側上唇部の皮膚直下に,境界はほぼ明瞭な小指頭大の腫瘍を認めた。腫瘍はやや弾性硬,無痛性であった。表面皮膚は軽度発赤し,一部腫瘍と癒着していた(写真3)。

口腔内所見:右側上唇粘膜は正常色で,触診により口腔外と同様な所見を呈する腫瘍を触知した。

超音波検査所見:皮膚直下に低エコーを主とする腫瘍を認め,辺縁は明瞭であった。

臨床診断:右側上唇部良性腫瘍の疑い。

処置および経過:局所麻酔下に口唇皮膚側より切開を加え,周囲組織より鈍的に剥離し,表皮,口輪筋の一部とともに摘出した。術後現在まで約6年経過しているが,再発は認めていない。

摘出物所見:腫瘍は8×9×10mm大,類円形,単胞性であった。黄白色の被膜で覆われ,内容物は黄白色粥状の物質であった。

病理組織学的所見:摘出した腫瘍の全断面のH-E染色では,嚢胞壁は重層扁平上皮と線維性結合組織からなり,内側には角化物様の内容物が認められた。皮膚付属器官は認められなかった(写真4)。

病理組織学的診断:類表皮嚢胞。

考 察

類皮あるいは類表皮嚢胞の発生頻度は,大野ら⁴⁾は口腔領域の嚢胞のうち6.6%と報告している。好発部位は口腔外科領域では口底部がほとんどで¹⁾,口唇部に発生したものは,大野ら⁴⁾は12%と報告し,円林ら⁵⁾は2.2%にすぎないと報告しており,まれと考えられる。われわれが渉猟し得た範囲では,口唇に発生した類皮あるいは類表皮嚢胞の報告は,本邦において過去20年間に19例であった(表1)³⁻¹⁴⁾。年齢は1歳8か月から59歳にわたり,性別では男性8例,女性5例,不明6例であった。発生部位は上唇11例,下唇8例で,大きさは直径50~60mmまで増大したものが1例みられるが,大部分は拇指頭大以下であった。病理診断では,類表皮嚢胞が14例と大多数をしめ,類皮嚢胞が3例,両者の併存が1例,不明1例であった。

本嚢胞の病因は一般的には先天的すなわち胎生期における外胚葉の迷入によって発生すると考えられているが,後天的に外傷その他による上皮あるいは表皮の迷入に由来するものもあると考えられている。症例1では23~24歳時に,また,症例2では8歳時に初めて口唇の腫瘍を自覚するようになったが,2例とも口唇部の外傷や炎症などの明確な既往がなく,どちらも先天的なものであろうと考えられた。

表1 本邦における口唇に発生した類皮あるいは類表皮嚢胞（1973～1991）

	報告者	年齢	性別	部位	大きさ	病理診断
1	黒柳 (1973) ⁶⁾	42	男	左上唇	38mm	類表皮嚢胞
2	草野 (1973) ⁷⁾	20	男	右上唇	8 mm	類表皮嚢胞
3	松田 (1975) ⁸⁾	5	男	上唇	拇指頭大	類表皮嚢胞
4	石川 (1976) ⁹⁾	43	男	左下唇	20×25mm	類表皮嚢胞
5	円林 (1976) ⁵⁾	20M	女	上唇	拇指頭大	類皮嚢胞
6	藤城 (1978) ¹⁰⁾	35	男	下唇	拇指頭大	類表皮嚢胞
7	大野 (1979) ⁴⁾	不明	不明	上唇		類表皮嚢胞
8	〃 (〃) ⁴⁾	〃	〃	上唇	直径 10mm 未満 2 例	類表皮嚢胞
9	〃 (〃) ⁴⁾	〃	〃	上唇	直径 10～20mm 2 例	不明
10	〃 (〃) ⁴⁾	〃	〃	下唇	直径 30～40mm 1 例	類表皮嚢胞
11	〃 (〃) ⁴⁾	〃	〃	下唇	直径 50～60mm 1 例	類表皮嚢胞
12	〃 (〃) ⁴⁾	〃	〃	下唇		類表皮嚢胞
13	横林 (1982) ¹¹⁾	31	男	左下唇	小指頭大	類表皮嚢胞
14	覚道 (1986) ¹²⁾	4	女	上唇	15×18×18mm	類皮と類表皮嚢胞の併存
15	佐熊 (1990) ¹³⁾	27	女	左下唇	15×10×8 mm	類皮嚢胞
16	中西 (1991) ¹⁴⁾	59	男	右下唇	30×20×15mm	類表皮嚢胞
17	武富 (1991) ³⁾	2	女	上唇	21×18×16mm	類皮嚢胞
18	自験例 (1991)	27	男	左上唇	15×13×8 mm	類表皮嚢胞
19	〃 (〃)	9	女	右上唇	8×9×10mm	類表皮嚢胞

治療は全摘出が最良とされており，今回の2例も全摘出を施行した．症例2では明らかに外表皮と嚢胞が癒着していたため皮膚側より切開を加え，一部皮膚を含めて摘出した．癒着については，嚢胞発生後炎症が併発したことが考えられた．予後は，完全に摘出することで良好とされている．症例1では，被膜が薄く術中被膜が破れ，可及的に剥離摘出したが被膜の残存が疑われ，このことが再発の原因と考えられた．また再手術後約6年経過しているが，再発を認めていない．症例2も術後約6年を経過しているが，再発は認めていない．

結 語

上唇部に発生した，類表皮嚢胞の2例を経験し，その概要を報告した．症例1は27歳男性で左側上唇部に発生し，また症例2は9歳女児で右側上唇部に発生した．2例ともに全摘出し，術後約6年経過し再発はない．

本論文の要旨は，第151回日本口腔外科学会関東地方会（平成3年11月16日，鶴見）にて発表した．

引 用 文 献

1) 石川梧朗監修：口腔病理学Ⅱ．改訂版，永末書店，京都，1982，401-403頁．
2) 上野 正，伊藤秀夫監修：最新口腔外科学，第3版，医歯薬出版，東京，1986，112頁．
3) 武富晶子，杉本忠雄，他：上唇に発生した類皮嚢胞の1例．日口外誌 37: 1191-1192 1991．
4) 大野邦博，曾田忠雄，他：口腔領域の類表皮嚢

胞50例の臨床統計ならびに本邦における文献的考察．日口外誌 25: 842-847 1979．
5) 円林義一，空閑祥浩，他：上口唇正中部に発生した皮様嚢胞の1例．日口外誌 22: 842-846 1976．
6) Kuroyanagi, K. and Kawabata, T.: Epidermoid cyst of the upper lip: Report of a case. Bull Tokyo Dent Coll 14: 95-98 1973.
7) 草野彰康，藤原弘且，他：上唇に発生した類皮嚢胞の1例（抄）．口科誌 22: 267 1973．
8) 松田 登，大久保滋郎，他：当科における軟組織に発生した類皮嚢胞，類表皮嚢胞17症例の概要．口科誌 24: 109-116 1975．
9) 石川武憲，森沢宣生，他：左側口角を含む下口唇部に発症した興味ある Epidermoid cyst の1症例—特にコレステリン結晶と異物巨細胞反応からみた問題点について—．日口外誌 22: 406-412 1976．
10) 藤城松一，堂原義美，他：下口唇に発生した epidermoid cyst の1例（抄）．日口外誌 24: 648 1978．
11) 横林敏夫，川崎建治，他：下唇に発生した類表皮嚢胞の1例および文献的考察．口科誌 31: 307-311 1982．
12) 覚道健治，荒木春美，他：上唇に発生した類皮および類表皮嚢胞の1例．日口外誌 32: 1238-1243 1986．
13) 佐熊 研，相馬重信，他：左側下唇部に発生した類皮嚢胞の1例（抄）．奥羽大学歯学誌 17: 174 1990．
14) 中西淳仁，宮本洋二，他：下唇に発生した類表皮嚢胞の1例（抄）．日口外誌 37: 1748 1991．